

蚕神社と小熊学校

伊奈波神社教学研究員 眞理子

今では蚕を身近に感じる人が少なくなりましたが、かつて養蚕は日本の主要産業の一つで、二十世紀初めに日本は世界一の生糸輸出国でした。旧暦正月晦日に行われる伊奈波神社の花の撓大祭では、現在も養蚕の豊凶が占われています。

岐阜町周辺では、江戸時代初めから薄絹が特産品として織られていました。江戸時代中期には技法と生産体制が発展し、縮緬が量産されるようになります。無地から紋織へと技術を高め、た岐阜縮緬は京都へ運ばれました。このころには縮緬の産地は岐阜だけでなく丹後・近江などにも広がっており、もともとの産地である京都西陣の織屋は販路と原料糸の入手に苦しむようになりました。そのため西陣の織屋は、地方で作られた絹織物が京都に入るのを制限し始めます。岐阜の縮緬生産者たちは尾張藩のバックアップ

を受けることでそれに対抗しようとなりました。

明和六年(一七六九)、縮緬を尾張藩の「御蔵物」にすることが出願されました。尾張藩の年貢として縮緬を京都に運ぶことで、移入制限をくぐりぬけようとしたのです。この目論見はうまくいき、岐阜町とその周辺の織屋は独自の市場を確保できるようになりました。このときの出願代表者四名の中には小熊村(現在は岐阜市金屋町・小熊町など)の伊藤金三郎と堀江吉三郎が名を連ねており、一八〇〇年ころの記録にも小熊村は「商家が多く、縮緬織屋、刻みタバコ、鍋釜鋳物、農具、鍛冶屋、酒屋などがある」と書かれています。小熊村は縮緬の産地であるとともに、その生産の差配人もいる地でした。

村内には、養蚕と織物を守護する蚕神が祀られていました。始まりは不明

ですが、「慶長年中に織田信孝の一乱(これは天正十一―一五八三年に織田

信孝が羽柴秀吉方に敗北した戦乱をさすのでしよう)で記録が焼失して由来が分からない」と述べており、ずいぶん古くから祀られていたと伝えて

います。しかし、その存在がはっきりするのは十九世紀半ばからです。嘉永元年(一八四八)に慈恩寺は、境内地藏堂に勧請されていた蚕守護神のために堂を建立して別社としたいと願い出しました。はじめは長さ四間半(約八メートル)、奥行き三間の堂で、火の用心のため瓦ぶきにする予定でした。しかし、湿気が多い土地で冬の雪や雨に瓦ぶきは耐えられないからと板ぶきに変更し、長屋を建てる土地を確保するために大きさも長さ二間、奥行き三間に縮小されました。蚕神の堂は翌嘉永二年正月に完成し、二月七日に遷座式が行われました。この日を祭日として、翌三年二月七日にはお供えの餅を参詣者へ配っています。こののち、二月の初午と春秋の彼岸には神前で大般若経が読まれました。これも当初は他寺から借りた経巻で執行されてい

ましたが、嘉永六年に自前の経典を備えるために寄付を募っています。

こうして慈恩寺境内に蚕神社が祀られたのですが、明治初めに神仏分離が命じられると別の場所へ移さなければならなくなりました。そこで選ばれたのが、小熊学校の空地です。

明治五年(一八七二)に学制が発布されると、有力者の寄附金をつのって各地に小学校が造られます。小熊村でも明治六年一月に円龍寺本堂を仮校舎として立敬義校(のち小熊学校と改称)が創立され、明治七年十一月に新校舎が建築されました。場所は現在の岐阜市秋津町で、巡査の初任給が月四円の時代に、校舎建築費用は二千余円という金額でした。明治十一年に明治天皇に献上された『岐阜県師範学校並同県下小学校写真真帖』(宮内庁書陵部蔵)から、この新校舎の姿を知ることができます。石垣を積んだ上に建つモダンな西洋風建築で、木造二階(一部三階)建ての本瓦ぶき、二階にはベランダがあります。学校の周囲は木の柵で囲み、柵の間には照明灯を備え、南面に校門の冠木門かぶきもんが開いています

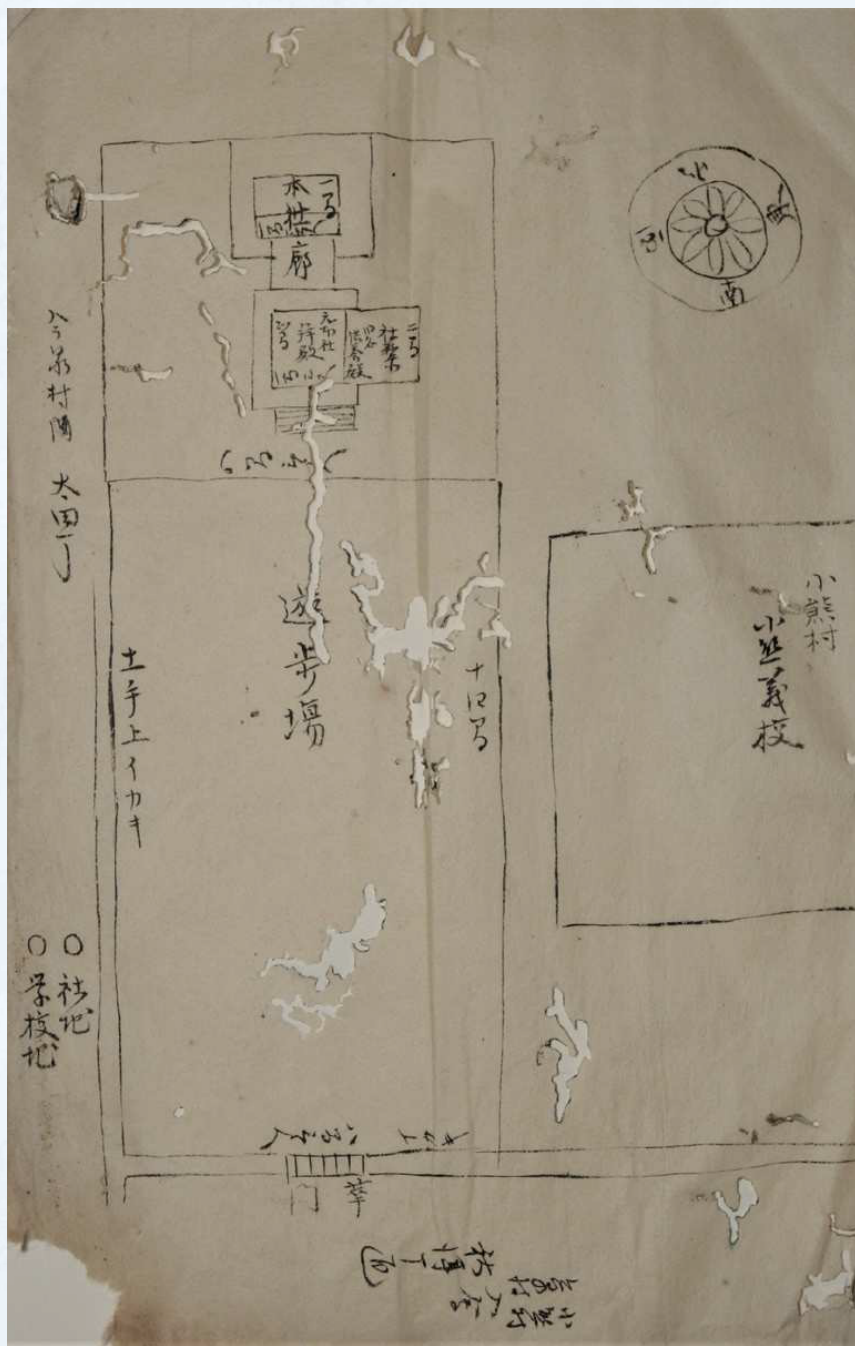
た。教場は八室あり、明治七年には教員四名、児童九三名(男五五、女三八)でした。明治八年には地域のモデル校として文部省の委託金から助成を受けており、同十年に岐阜県師範学校の附属校となつて教育実習が行われるようになります。

蚕神社は、この小熊学校内に借地して遷座しました。掲載した写真はこの

ときの図面で、「遊歩場」は学校の運動場、南にある「華門」が冠木門、西・南の「イカキ」が木柵です。神社は本社・廊・拝殿・社務所からなり、拝殿に「元本社」と注記されていることから、慈恩寺境内にあった蚕神社の本社を移築して拝殿としたと思われる。遷座は明治七年十二月に願し、翌年一月に許可されました。このとき、学校敷

地内に遷座することを考慮したのか、「学神」も合祀することとしました。伊奈波神社は明治七年十二月に蚕神社の祭祀を行つており、慈恩寺から遷座する方針が決まったときから関わつたと思われます。

しかし、この場所も蚕神社の安住の地とはなりませんでした。小学校の児童数は明治十年には二一三名、十五年



には二二一名と増えていき、運動場がせまくなつたため、再びの遷座となつたのです。新たな場所は岐阜公園で、学神社とともに公園内の東照宮に合祀されることになりました。昨年一月発行の

社報28号に拙文「徳川家康朱印状と東照宮」を掲載していただきましたが、そこで東照宮③として紹介したものがこれに当たります。東照宮③は明治二十年に西荘村(現在は岐阜市)の立政寺の家康像を移して建立された社殿です。ここに蚕神社・学神社を移転合祀する願書は蚕神社と東照宮の信徒総代から岐阜県知事小崎利準に出されていきます。年月は不明ですが、小崎知事は明治二十六年三月に知事を辞任しており、同二十四年の濃尾震災直後とも考えられませんか、明治二十二年ころでしょうか。そして、明治四十三年に蚕神社・学神社は、東照宮とともに権現山の峯本宮に合祀されました。

小熊学校は明治三十四年に伊都美小学校と合併して明德小学校となります。そして平成二十四年度に明德小学校が本郷小学校と統合されて明郷小学校となったのは記憶に新しいところです。十五年ほどの期間ではあります。小郷学校と歩みをともしました。蚕神社は、今も峯本宮に祀られています。